放っておくとこわい　溶連菌感染症

★溶連菌感染症は、溶連菌（溶血性連鎖球菌）という細菌がのどについて、かぜに似た症状をおこします。発疹を伴う場合、以前はしょう紅熱と呼ばれていました。２～10才（４～６才が最も多い）頃にかかりやすいうつる病気で、一年を通じて保育園、幼稚園、小学校で流行しています。▪

★感染してから症状が出るまでの期間（潜伏期）は約２～５日です。
最初はのどの痛み、発熱などのかぜによく似た症状で始まります。のどは赤みがつよく粘膜には点状の出血斑がよくみられます。へんとう腺も赤くはれ、白いうみがつくことがあります。２日目頃から顔、手足、からだの順にかゆみのある発疹が出ることがあります。３～４日ぐらいで舌が赤くなりブツブツも大きくなりイチゴのようになります。熱が下がって一週間から10日くらいして、体や指先の皮がむけることがあります。▪

★診断のため、のどに溶連菌がついてないか検査します。細菌培養検査は２～３日かかりますが、最近は外来で10分くらいでわかる迅速検査ができるようになりました。▪

★治療は抗生剤はきちんと10日間飲まなければなりません。抗生剤で症状はすぐとれますが、途中でやめると菌が完全に消えず再発します。最後まで医師の指示通り確実に飲みましょう。まれに症状がなく溶連菌がのどについているお子さんがいますが（保菌者）この場合治療の必要はありません。

★溶連菌感染症がこわいのは、充分治療しておかないと、症状がなくなって3週間後くらいに急性腎炎、リウマチ熱の病気をおこすことがあるからです。急性腎炎は血尿、浮腫（からだのむくみ）、高血圧などの症状があります。リウマチ熱は発熱、関節痛などで始まり心臓弁膜症の原因になることがあります。いずれも入院治療が必要になります。▪

★兄弟に感染する率が高いので、症状があれば軽くても早めに受診しましょう。▪

★登園・登校は、抗生剤を確実に飲んで熱が下がり元気があればかまいません。